

子宮頸がん（HPV）ワクチンについて

日本では、2009年にワクチンとして承認され、接種が始まりましたが、種後の疼痛や運動障害などの多様な症状が報告され、接種の積極的推奨の一時差し控えとなっていました。しかしながら、2021年11月26日付けで「最新の知見を踏まえ、改めて HPV ワクチンの安全性について特段の懸念が認められないことが確認され、接種による有効性が副反応のリスクを明らかに上回ると認められた。」と自治体に通知され、2022年4月から積極的な勧奨を再開されています。

●子宮頸がんの現状

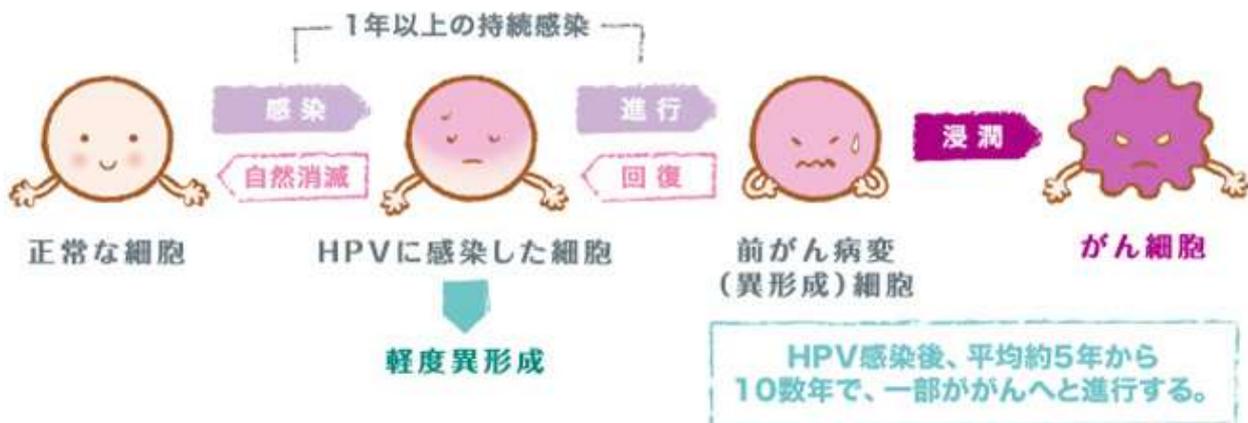
子宮頸がんは子宮の頸部という支給の出口に近い部分にできるがんで、若い世代の女性のがんの中で多くを占めるがんです。

日本では、毎年約1.1万人の女性がかかり、さらに毎年、約2800人の女性が亡くなっています。患者さんは20歳代から増え始め、30歳代までにがん治療で、子宮を失ってしまう人（妊娠できなくなってしまう人）も、毎年約1200人います。

●子宮頸がんになる仕組み

子宮頸がんの95%以上が、HPV（ヒトパピローマウイルス）というウイルスの感染で生じます。性的接触のような、濃厚な接触があった場合のみ HPV が感染するのです。

HPV に感染しても、すぐにがんになるわけではなく、いくつかの段階があります。



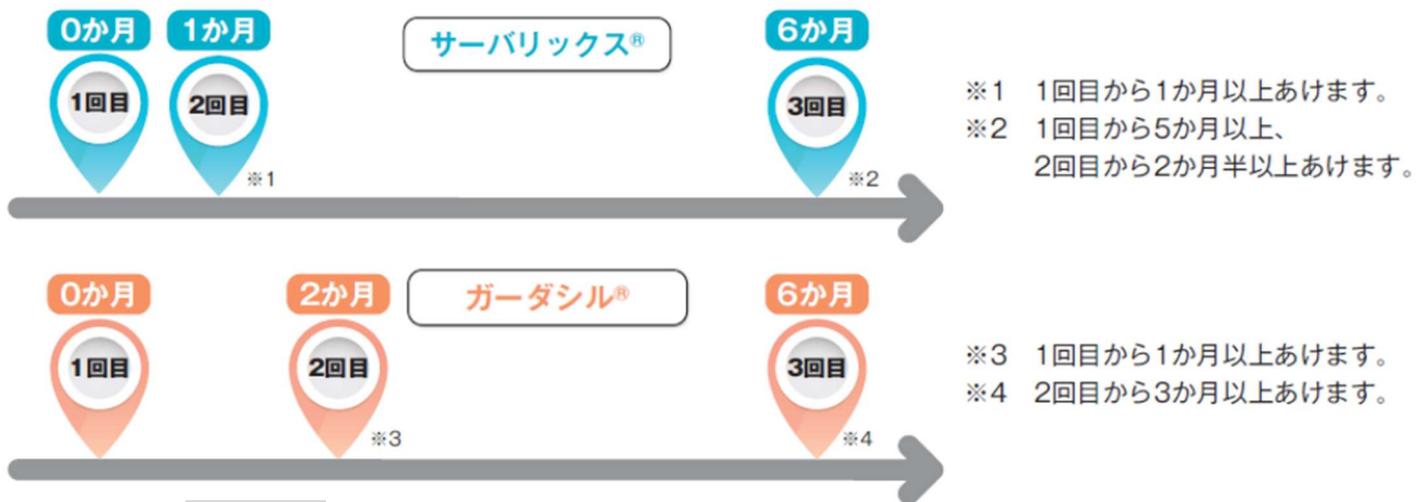
●HPV ワクチンの効果

日本人の子宮頸がんの50～70%はHPV16型と18型が原因です。HPVワクチンを接種することにより、HPV16型・18型の感染を防ぐことで、子宮頸がんの原因の50～70%を防ぎます。

日本医療研究開発機構AMEDのNAGOYA STUDYでは、HPV16・18型の感染のワクチン有効性は91%と高い感染予防効果があることが分かりました。さらに、初交前に接種することで、ワクチン有効性は94%まで高まることが示されました。

3回の接種によって、少なくとも10年以上は抗体が感染を予防し続けることが分かっています。

●HPV ワクチンの接種について



※当院では「ガーダシル」を常備しています。

○上記の他に、「シルガード9」という9価ワクチンもあります。(2021.3月発売開始。現在、任意接種)

「シルガード9」は子宮頸がんの原因となる HPV の 90%をカバーと言われています。

(★厚労省の指示により、前例登録を行うワクチンです。そのシステムである「ワクチンQ ダイアリー」への登録が必要です。初回接種希望の方は、ご来院前に「ワクチンQ ダイアリー」にアクセスし、新規登録を行って下さい。)

対象年齢：9歳以上の女兒

接種間隔、回数：ガーダシルと同じ

接種価格：自費 26,000 円 (1回につき) ※接種希望される場合は、必ず事前に連絡をして下さい。

●HPV ワクチンのリスク

HPV ワクチン接種後には、多くの方に、接種部位の痛みや腫れ、赤みが起こることがあります。

稀ですが、重い症状(重いアレルギー症状、神経系の症状) ※1 が起こる事があります。

頻度	サーバリックス®	ガーダシル®
10%以上	痒み、注射部位の痛み・赤み・腫れ、腹痛、筋痛・関節痛、頭痛、疲労 など	注射部位の痛み・赤み・腫れ
1～10%未満	じんま疹、めまい、発熱 など	注射部位の痒み・出血・不快感、頭痛、発熱 など
1%未満	注射部位の知覚異常、しびれ感、全身の脱力	手足の痛み、腹痛 など
頻度不明	手足の痛み、失神、 など	疲労感、失神、筋痛・関節痛 など

(2021年12月時点の添付文書に基づく)

このように、因果関係があるかどうか分からないものや、接種後短期間で回復した症状を含めて、HPV ワクチン接種後に生じた症状として報告があったものは、接種 1 万人あたり、約 9 人です。うち報告した医師や企業が重篤 ※2 と判断した人は、1 万人あたり約 5 人です。(重篤な症状は入院)

HPV ワクチン接種歴のない方においても、HPV ワクチン接種後に報告されている症状と同様の「多様な症状」を有する方が一定数存在したことが明らかになっています。

※1 重いアレルギー症状：呼吸困難やじんましん等(アナフィラキシー)、神経系の症状：手足の力が入りにくい(ギランバレー症候群)、頭痛・嘔吐・意識低下(急性散在性脳脊髄炎(ADEM))等 ※2 重篤な症状には、入院相当以上の症状が含まれていますが、報告した医師、企業の判断になるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることがあります。